

学生海外調査研究	
フレイレ教育思想と「解放の神学」のつながりを明らかにする -フレイレの WCC（世界教会協議会）滞在中の活動に着目して-	
氏名 前村 絵理	人間発達科学専攻
期間	2014 年 09 月 01 日～2014 年 10 月 02 日
場所	スイスのジュネーブ
施設	WCC（世界教会協議会）のアーカイブ・図書館

内容報告

1. 問題の所在

今日グローバル化の進展により国境を越えた移動がより活発になっている。日本では、日本再興戦略（平成 25 年 6 月 14 日閣議決定）の中で、グローバル化に対応する人材力の強化や高度外国人人材の活用が唱えられた。また、在留外国人（旧登録外国人）の数は、1993 年の 132 万人から 2013 年には 207 万人へと増加している（法務省，2001；2013）。このように多民族・多文化化が進む中で、様々な背景をもつ人びとがいかにして共に生きるかという大きな課題があり、そのための教育が求められる。

ドイツでは、偏見や差別を幼児期から防止・克服するために、批判的に行動する力を子どもに育むことを目的とする「アンチバイアス・アプローチ」を理論的な柱とし、幼児期における偏見を意識した教育の定義と発展を試みる「キンダーヴェルテン」プロジェクトが実施された。「キンダーヴェルテン」プロジェクトの理論と実践の分析を行ったところ、理論と実践においてフレイレの「対話概念」と「意識化理論」がプロジェクトにおいて具体化され、差別や偏見のないよりよい社会の形成をプロジェクトが目指している、ということが申請者の修士論文で明らかになった。

フレイレの「意識化」は、方法論の上でも、霊性（mystic）の上でも、BCC（キリスト教基礎共同体）¹の活動に力強い影響を与えた。ベリイマン（1985）によると、フレイレの名は識字教育との関連で最もよく知られているが、彼の考え方が非常に公汎な影響力を持ったのは BCC を通してであり、1971 年にグティエレスにより理論化された「解放の神学」は、BCC からくる草の根の経験によって大きな刺激を受けた。グティエレス（1971）によると、「解放の神学」における「解放」という言葉の意味は、互いに貫き合う 3 つのレベル、言い換えれば、解放の過程への 3 つのアプローチに分けることができる。第一に、「解放」は、抑圧されている民衆や社会階級のねがいを表している。特に、豊かな国や抑圧する階層との対立へと彼らを駆り立てるため、経済・社会・政治プロセスの闘争的な一面を強く表している。第二に、歴史は人間解放の歴史としてとらえられる。その過程において、人間は、自己の運命に対する責任を自覚して、それを担うものとみなされる。こうした理解はダイナミックな文脈をもたらして、人びとの望む社会変革の地平を、いっそう広いものとする。第三に、「解放」は、歴史における人間の存在とその行為に息吹きを与える聖書の泉へと我々を誘う。聖書の中でキリストは我々を罪から解放する者として描かれている。罪とは、あらゆる友情の断絶、あらゆる不正と抑圧の究極的な原因である。キリストは人間を真に自由にする。つまり、人間を、キリストとの交わりの内に生かすのであり、これこそ、全ての人間の兄弟愛の礎である。グティエレス（1985）によると、こうした三つのアプローチは、複雑な一つのプロセスの、三つの意味のレベルである。そして、このプロセスは、キリストの救いの業の内に、その深い意味を見出し、その完全な実現をみる。また、三つの意味のレベルは相互依存関係にある。そして、これらの 3 つの側面が、一括して考察されうるということを押さえることで、次の 2 つの落とし穴をさけることができるとグティエレスは強調する。一つは、「理想主義的・精神主義的アプローチ」であり、グティエレスによると、これは情け容赦のない現実からの逃避以外の何ものでもない。二つめは、差し迫ったニーズに応えるという口実の下に、表層的な分析と短期的計画で間に合わせるということである（グティエレス，1985；44-45）。

フレイレは、1970 年から 80 年の間、WCC（世界教会協議会）において活動したのであるが、WCC（世界教会協議会）が 1973 年に開催した『「解放の神学」シンポジウム』において南アメリカを代表

して発題している（文，1975）。そのため、WCC におけるフレイレの働き、とりわけ『『解放の神学』シンポジウム』におけるフレイレの発題に注目することは、フレイレ教育思想と「解放の神学」のつながりを明らかにし、フレイレ教育思想の背景に迫る上で非常に重要である。しかしながら、フレイレの WCC 滞在中の活動はこれまであまり注目されてこなかった。ゆえに今回は、スイスのジュネーブにある WCC のアーカイブと図書館を訪問し、資料・文献調査を行った。なお、本調査は「女性リーダーを創出する国際拠点形成」を前提とした学生海外派遣プログラムによる、国際的な女性リーダーの育成に関わる調査研究である。

2. 調査対象と明らかになったこと

2.1 WCC（世界教会協議会）-WCC で入手した資料より-

1948 年に設立した WCC は、イエス・キリストへの共通の信仰をもち、唯一神（父・子・聖霊）の栄光を表わすために召された 345 のメンバーチャーチ³により構成される世界的な団体である。この世界的団体において、諸教会は、唯一の信仰における明白な一致を促進する全キリスト教会主義（ecumenism）というビジョンを追求する。WCC が発行したパンフレット（An introduction to the World Council of Churches）に従い、「一致（Unity）」「布教（Mission）」「証人（Witness）」「奉仕（Diakonia）」の 4 項目において、WCC の理念や働きについて紹介していく。WCC の理念やその働きをみることは、WCC で 10 年間活動したフレイレの教育思想を理解する上でも大変重要である。

一致（Unity）

140 カ国からの 5.5 億人のクリスチャンを代表する WCC は、教会が、①連帯感を生み出し②再建を促進し③違いを克服し④互いの多様性から学ぶことができるユニークな場である。1948 年以降、数えきれないほどの WCC 主催の対話や協議会は、諸教会間の表現の多様性を明確にすることや、彼らの共有する信仰や伝統のさらなる理解を奨励することに努めた。WCC のメンバーは主にプロテスタント、正教会、聖公会から構成されるが、WCC はメンバー間だけではなく、ローマ・カトリック教会、福音派教会、ペンテコステ派教会の同意や協働にも積極的な姿勢を示している。

伝道（Mission）

伝道は、福音を明瞭に証言することを常に意味する一方で、人びとの威厳に対する敬意や、貧困・不正・排除・病気・暴力に苦しむ人びととの連帯意識を育むものとしても考えられるようになっていく。というのも、神の霊（The Spirit of God）は、真実・正義・平和の探究へと人びとを導くからである。WCC は、国際研究センターやボッセイにあるエキュメニカル研究所、全キリスト教会成立におけるグローバル・リーダーシップ、神学教育、宗教間の対話や協働の先駆的なプログラムなどを通して、深い学びを促進し、人生を変える出会い（life-changing encounter）を提供している。

証人（Witness）

WCC は、特に国際連合と協力し、国際問題に関する教会委員会（Commission of the Churches on International Affairs）を通して正義・平和・人間の安全保障への予言的な意見を表明しながら、国際レベルで持続的・効果的な主張者であり続けている。人びとを保護し、彼らの生活を向上し、人間の尊厳を擁護するために積極的に介入しながら、WCC は不公正な構造に挑んでいる。最近とりわけ重点を置いているのが、「暴力を克服する 10 年間（Decade to Overcome Violence）」という取り組みである。この取り組みは、対立・暴力・不正を理解し、それらに立ち向かうというものである。さらに、WCC は、持続可能な未来のためにも活動している。危険にさらされた国や気候難民（climate refugee）の懸念を国際連合や国際機関に提示することで、気候正義（climate justice）や持続可能な地域社会（sustainable community）のための働きを続けている。

奉仕（Diakonia）

戦後、WCC は、戦争難民や災害被害者、また移民に対するクリスチャン教会による国際的な対応の先頭に立ち続けている。また、WCC は、クリスチャン共同体という枠を超えて、ナイジェリアにおける「2012 クリスチャン-ムスリム 和平工作（the 2012 Christian-Muslim peace initiative）」のような宗教間の協働も促進している。また、WCC は、教会と社会における女性との連帯に関しても先駆的な努力をし続けている。女性の不平等なアクセスや扱いやジェンダーに基づく暴力、女性の健康、経済的不公正のような問題に対して、WCC の数々のプログラムは、正義と尊厳を中心に、女性と男性の真正な共同体への包含や相互作用を考察する。さらに、クリスチャンの奉仕とは、周辺化された人びとのニーズや見識に耳を傾けることを要求する。奉仕は、WCC のエキュメニカルな障がい者擁

護ネットワーク（Ecumenical Disability Advocacy Network）における諸教会の内外における教育や支持も意味する。

2.2 「解放の神学」シンポジウム

2.2.1 「解放の神学」シンポジウムの特徴

フレイレは、「私がまだ若くてレシフェの近くにある小さな街にいたとき、プロテスタントとカトリック間に争いがあることについて理解できなかったし、受け入れられなかった。まさにその時、私はエキュメニカルなアプローチのようなものについて思いめぐらしていた。そういうわけで、お別れを言うのと同時に、あなた方に感謝したい」（One World, 1980）と述べて、エキュメニカルな共同体、つまり超教派共同体としての WCC を評価している。

WCC でのフレイレの働きの一つに、1973 年 5 月にジュネーブで開催された『「解放の神学」シンポジウム』における南アメリカを代表しての発題が挙げられる。このシンポジウムは、「伝統的神学が黒人・解放神学に会う時」（Lemone, 1973）であり、主に西ヨーロッパの人びと、またいくつかの社会主義国、アメリカ合衆国からの代表や、多くの宗教ジャーナリストが参加した。シンポジウムでは「エキュメニカルな出会い（ecumenical encounter）」が生じた。「旧世界（old world）」の多様な宗派・国々を代表する聴衆・学生・神学者・ジャーナリスト・平信徒・ローマカトリック・プロテスタント・WCC のスタッフにより引き起こされた雰囲気があったが、それは「単なる他のミーティング」以上のものになる運命にあった。この出会いは、歴史の交差点（a cross point of history）であり、エキュメニカルな歴史である。また、シンポジウムは解放のための闘いであった／ある（Lemone, 1973: 177）。

2.2.2 フレイレの発題の特徴

Freire の発題テーマは、「教育・解放・教会」であり、このテーマを深刻に提言する時、もはや教会や教育の「中立（neutrality）」について語ることはできない（Freire, 1973）。「中立」の主張というものは、教会と歴史への単純で幼稚な見方をする人びとや、現実的理解を中立の要求（a claim of neutrality）の背後にそつなく隠してしまう人びとからくるものである。彼らが歴史に関係する教会の「中立」を主張するとき、彼らは必然的に一般大衆に対する権力エリートを支持する政治的立場をとることになるのである。つまり、フレイレによると、被抑圧者の抑圧者からの解放を目指す教会や教育の「中立」はありえないのである。さらに、フレイレは、教会を「伝統的教会（The traditional church）」「近代化教会（The modernizing church）」「予言的教会（The prophetic church）」の三つに分類し、「伝統的教会」「近代化教会」を批判し、ラテンアメリカにおける「予言的教会」を提唱した。

伝統的教会

フレイレは、伝統的教会を、いまだに植民地主義であるとし、罪・地獄の苦しみ・永々の破壊の強調を好むと批判している。彼らにとって、「労働」とは、創造と再創造の世界における人間の行動ではなく、人間にとって支払わなければならない代償である。教会の宗派がカトリックであれプロテスタントであれ、抑圧されている民衆は沈黙の文化に溺れ、奉仕を提供する教会に避難する。民衆が沈黙の文化に埋もれているため、そこにあるのは支配階層の声のみである。こうした教会は、この世を罪・不道德・不純な世界として軽蔑し、抑圧者への被抑圧者である民衆の態度を「あなたには権力があるが、あなたが牛耳る世界は邪悪な世界であり、我々はその世界を拒絶する」というものにし、被抑圧者の現実的問題の解決どころか、被抑圧者をこの世界からより疎外する。そして、こうした教会が教育の分野でする役割とは、民衆を麻痺させ、世界から疎外することである。

近代化教会

歴史的プロセスに完全に埋もれていた民衆は、産業化に応じて表に現れてくる。伝統的な教会は世界を邪悪なものとみなすように民衆を奨励することで、抑圧された被抑圧者階層を疎外したが、近代化教会はそれとは異なる方法で彼らを疎外する。第一に、身分を維持する変革を擁護することによって、第二に、「人道主義」「人間化」という表現を抽象的なカテゴリーに帰することによって、近代化教会は、民衆から現実的な意味を取り除いてしまうのである。階層社会の改革なしに「解放」はないように、「解放」なしに「人間化」はありえない。つまり、階層社会における万人の「人間化」は不可能なのである。たとえ彼らが「解放教育」を語ったとしても、それは、人間の社会的・歴史的実践を通してではなく、意識の変化による個人的な行動としての「解放の展望（vision of liberation）」によって条件づけられる。そして、結局、「中立」と思われる方法・手段を強調することになるのである。

予言的教会

権力構造のエリート同様、伝統的教会や近代化教会によって攻撃・反対されながら、このユートピア的・予言的・希望にあふれた運動は、一人よがりの世のため人のためという態度や一時しのぎの改革を拒絶し、革新的な社会変化に従事する。静的・固定的な考え方を拒絶し、批判的に考えるために、予言的教会はかれら自身を「中立」とみなさない。予言的であるということは、対立が存在する社会構造への批判的分析、イデオロギー的選択を要求する。また、プロテスタントやカトリックという区別は重要ではなく、ラテンアメリカの予言的クリスチャンは、被抑圧者階級に加わるために、無知であることを非難し、従事することに忠実であり続けた。予言的教会は、空虚な公然の非難により被抑圧者をより疎外するための家ではなく、抑圧されているものを「新出エジプト記 (a new Exodus)」へと誘う。さらに、フレイレは、「イエス・キリストは決して保守的ではなかった (Christ was no conservative)」(Freire, 1973; 45) と指摘し、予言的教会は、キリストのように常に前進しなければならないと述べている。こうした予言的教会の教育的役割とは、上述した二つのタイプの教会の教育的役割と完全に異なり、教育は人間解放にむけて行動を変革するための手段となる。

3. 考察

フレイレは、シンポジウムにおいて、ラテンアメリカにおける予言的教会を他の二つの教会のあり方と比較し、予言的教会のあり方を推奨している。伝統的教会については、この世を罪・不道德・不純な世界として軽蔑し、被抑圧者の現実的問題の解決どころか、被抑圧者をこの世界からより疎外するものとして批判している。この批判は、グティエレスのいう「解放」の3つの側面が一括して考察されない場合に起こりうる落とし穴の一つである、民衆に現実からの逃避を促す「理想主義的・精神主義的アプローチ」への批判とも言えるだろう。また、身分を維持する変革の擁護や、「人道主義」「人間化」という表現を抽象的なカテゴリーに帰することで、民衆から現実的な意味を取り除く近代化教会も批判している。この批判は、グティエレスがもう一つの落とし穴としている、「差し迫ったニーズに応えるという口実の下に表層的な分析と短期的計画で間に合わせる」ということへの批判と考えられる。このように、フレイレのシンポジウムにおける発題内容に着目することで、フレイレの教会理解と「解放の神学」との強いつながりが明らかになった。そして、『「解放の神学」シンポジウム』においてフレイレが目指したものは、「伝統的教会」「近代化教会」ではなく「予言的教会」の意義や重要性を訴えることで、予言的教会としての教会の一致であったと考えられる。

しかしながら、「伝統的神学が黒人・解放神学に出会う時」(Lemone, 1973) であったシンポジウムでは、「対話 (Dialog)」にはとうていならない「議論 (Debate)」が盛んに繰り広げられた。また、「抑圧されている人びと」と「抑圧する人びと」が人生とその理解においてどれほどかけ離れているのかをシンポジウムにおける議論は顕著に示したこと、また、理解や拒絶などさまざまな反応が生じたことが報告されている (Lemone, 1973) ことから、教会の一致とは決して容易なものではないということがうかがえる。しかし、フレイレによると、「人間として生きるために闘う被抑圧者は、支配と圧迫のためにある抑圧者の権力をとりのぞくことで、被抑圧者は、抑圧の行使によって抑圧者から失われてしまった人間性をも甦らせる」(フレイレ, 1979: 38)。つまり、シンポジウムにおけるフレイレの発題は、その反応がショックや拒絶であったにせよ、抑圧者側にいる教会の意識に働きかけたことから、予言的教会としての教会の一致に向けた大きな一歩といえるだろう。今後は、フレイレの「抑圧者の人間化を試みる被抑圧者」に着目し、さらにフレイレ教育思想への理解を深めていきたい。なお、本調査研究は「フレイレ教育思想と「解放の神学」のつながりを明らかにする-フレイレの WCC (世界教会協議会) 滞在中の活動に着目して-」というテーマで、来年6月の異文化間教育学会で発表する予定である。

注

1. 民衆、主として貧しい民衆によって構成される。そこでは、意識化、聖書の学習、礼拝、相互扶助、そして自分たちの権利を守るための政治活動が一つに結び合わされる。BCC の規模はさまざまで、12 人くらいから 100 人、あるいはそれ以上の数の人びとからなるものまである。このような共同体は、ブラジルだけでおよそ 8 万あるといわれ、ラテンアメリカ全体にわたって存在している (ベリイマン, 1985)。ベリイマン (1985) によると、こうした数量的な存在以上に重要なことは、BCC が代表するようになってきた社会的な力である。BCC の起源と機能、そしてその政治的意味についてはベリイマン (1985) が詳しい。
2. 高尾 (1986) は、今世紀に限っても、社会問題の重要性を訴えた 1931 年の教皇回章から始まって、社会正義を具体的に論じた 1961 年の回章、地上の平和を訴えた 1963 年の回章、1965 年の第二バチカン公会議の「現代世界憲

章」、

諸民族の相互援助を訴えた1967年の回章、そして「正義と平和委員会」の創設が「解放の神学」の先駆的な役割を担ったと述べている。

3. 正教会、聖公会、バプテスト教会、ルター派教会、メソジスト教会、改革派教会、合同教会、復古カトリック教会、

聖トマス教会、メノー派教会、友会徒教会、会衆派教会、使徒教会が含まれる。また、WCCは、ローマ・カトリック教会との公式的な働きにおける関係や、まだ構成員ではない福音派やペンテコステ派教会との新たに発生した

関係もある。

参考文献

高尾利数（1986）「解放の神学-キリスト教を批判的に継承する視点から」『平和研究』11, 59-69.

法務省（2001）平成13 年末現在における外国人登録者統計について

http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/press_020611-1_020611-1.html（2014.05.15 アクセス）

法務省（2013）在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001118467>（2014.05.15 アクセス）

文東煥（小杉尅次訳）（1975）『人間解放とキリスト教教育』新教出版社。

山田経三（2013）「第2 パチカン公会議と解放の神学に基づく世界の平和」『上智経済論集』58(1・2), 1-5.

Berryman, F. (1984) Basic Cristian Communities and the Future of Latin America, *Monthly Review*, 36(3), 27-40

（市橋秀夫(訳)1985「解放の神学と草の根教会-キリスト教基礎共同体とラテンアメリカの未来」『新日本文学』40(11), 29-40）

Freire, P. (1970). *Cultural Action for Freedom*, Cambridge Mass.: Harvard Educational Review.（柿沼秀雄(訳)1984

『自由のための文化行動』亜紀書房）

Freire, P. (1972). *Pedagogy of the oppressed*, Harmondsworth: Penguin.（小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周(訳)1979『被抑圧者の教育学』亜紀書房）

Freire, P. (1973) *Education, Liberation and the Church*, *RISK*, 9(2), 34-48.

Gadotti, M. (1989). *Convite a Leitura de Paulo Freire*, Sao Paulo: editora scipione.（里見実・野元弘幸(訳)1993『パ

ウロ・フレイレを読む』亜紀書房）

Gutierrez, G. (1988) *Theology of Liberation*, Orbis Books; Revised edition.（関望・山田経三(訳)1985『解放の神学』岩波現代選書）

Lemone, A. (1973) Reports on a Symposium: When Traditional Theology Meets Black and Liberation Theology, *Christianity and Crisis*, 33(15), 177-178.

One World. (1980) WCC FOCUS, *One World*, 58, 15-16

WCC's pamphlet, *An introduction to the World Council of Churches*, WCC

ボックスナンバーとコンテンツ：

4201.1.1/1 Literary supplement Religious books section-First Thoughts-
Prayers for the use of FRIENDS of the CHURCH of ROME

4201.1.2/2 The Vatican and Non-Catholic
Pope Pius XII on religious tolerance
Vatican to send aide to all-church talks

4201.1.2/3 Roman Catholic Church and The First Assembly of The World Council of Churches

4235.3.2.1.1/3 Adult Basic Education-the work of Paulo Freire-

992.1.1/02 Report on the work of Paulo Freire: visits, meetings and contacts 1970-1974

まえむら えり／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻

指導教員によるコメント

前村さんは、博士後期課程に入学して以降、修士論文で注目したフレイレの思想をさらに深める研究を続けてきました。その中で、これまであまり注目されてこなかった、1973年の「解放の神学」シンポジウムにおけるフレイレの発言についての研究の必要性を感じて、今回の資料調査を行いました。

その結果、会議におけるフレイレの発題のみならず、それに対する周囲の反応を分析することが可能となってきましたが、このことは、フレイレ教育思想のさらなる理解へつながるものとして注目されます。今回の調査は、わずか1ヵ月間という短い調査期間でしたが、渡航前に入念な調査計画が立てられていたこともあり、ジュネーブの世界教会協議会のアーカイブと図書館における調査は実りあるものとなったといえましょう。今回の資料調査で重要な資料を数多く収集してきていることから、今後の研究のさらなる発展が期待されます。

(人間文化創成科学研究科人間科学系・小玉亮子)

Reveal the relationship between Freire's pedagogical thought and theology of liberation

Eri Maemura

To reveal the relationship between Freire's pedagogical thought and theology of liberation, I visited WCC's archives and library in Geneva. Freire worked there for 10 years(1970-1980), therefore in archives and library there are many materials, such as reports, articles and books which are relative to Freire's work in WCC. Focusing on Freire's suggestion at the symposium, my research there revealed that there is a strong relationship between theology of liberation and the style of church which Freire recommended. And judging from the reports of symposium, the Freire's suggestion gave a great impact to the European traditional churches with his progressive idea. Further research about the meaning of this impact will help me to understand his pedagogical thought deeply.